

イラン近代における社会批判精神の表出

—知識人による西欧小説の翻訳行為から—

大阪大学言語文化研究科言語社会専攻 博士後期課程 1 年（助成時）
同上 博士後期課程 2 年（現 在）

木下 実紀

●研究の背景と目的

イランの文学史では、伝統的なペルシア語古典定型詩の地位が圧倒的に優勢であった。今日のイラン現代文学に至るには、19 世紀の近代化と共に口語・俗語を含んだ西欧型の戯曲や小説が翻訳を通して受容されたという経緯がある。これらは 19 世紀初頭に西欧に派遣され、教育を受けた知識人により翻訳されたが、必ずしも原作に忠実ではなく、1906 年の立憲革命期にかけての祖国の状況を改善しようと意図する思想を盛り込んでいた。ゆえに、翻訳というよりも「自由翻訳」や「翻案」と位置付けられる。

筆者はこれまでの研究で、文化的背景による翻案の特徴を解明してきた。これは外国の著作をイラン化した文学的手法であると指摘できるが、それ以上に社会批判の要素に注目すべきであると考えた。

これを踏まえた上で、本研究の目的は、近代イランにおける西欧文学作品のペルシア語翻案作品を分析し、近代イラン知識人が西洋思想を翻案する過程でどのような点に改変や追加を施したのかを検証することで、彼らの翻案手法に社会批判を含んだ普遍性があることを明らかにすることを目的とする。

●研究項目とその内容

1. イランへの研究留学

2. 翻案戯曲作品『いやいやながら医者にされ』

原作はフランスのモリエール(1622-1673)による作品であり、イラン人のエーテマードッサルタネ(1843-1896)による翻案を扱った。

3. 翻案小説『72 派の宗教談義』及び『エスファハーンのハージーバーバーの冒険』

①『72 派の宗教談義』はイラン人のアーガーハーン・ケルマーニー(1853-1896)による翻案で、ベルナルダン・ド・サン・ピエール(1737-1814)の小説『スーラトのカフェ』が原作である。

②『エスファハーンのハージーバーバーの冒険』はジェームズ・モーリア(1782-1849)が原作で、ミールザー・ハビーブ・エスファハーニー(1835-1893)によりペルシア語に訳された。

●研究の成果

1. 『いやいやながら医者にされ』のペルシ語版の特徴

①文章の追加及び変更

戯曲中の幕の前後に情景を説明する長文が追加されていた。本来、戯曲は上演して目と耳で理解するが、当時のイランでは宗教的理由により劇を上演することは不可能であったため本作品が小説に近い形で扱われていたことがわかる。また、読者の理解を助けるためか、適宜会話の順番も変更されていた。

②形式の変更

原作は全 3 幕の構成であるが、翻案では全 4 幕に変更されていた。また、本来上演される場合の舞台

の暗転を考慮し、それぞれに「景」という区切れがあるが、翻案では省略されていた。物語として読む際にある程度纏まった量を作ることでの流麗さを創り出した工夫であると言える。

③文体の工夫

医者のかぶりをした主人公が患者やその関係者に対して威厳を見せようと、難解な言葉を用いて自身の知識を披露する場面ではアラビア語が用いられていた。庶民が理解しないアラビア語を用いることで権力者側の高慢な態度や民衆との乖離を皮肉っていると考えられる。また、原作では全く見られない歌が追加されており、イラン北部の方言の一つであるマーザンダラーン方言であることが明らかになった。

④人名や地名のイラン化

物語を異国のものではなく自国の身近なものに感じてもらうための手法が施されていた。例えば原作では主人公がスナガレルであるが、翻案版ではムーサーというイラン人の名前へと変更されている。

2. 『72 派の宗教談義』の特徴

①詩の挿入

原作には全くない詩が挿入され、それ以外にも 17 か所に詩の挿入が見られた。これは訳者オリジナルの詩と思われるものもあれば、歴史上有名な詩人から引用している場合もあった。

②文章の大幅な追加

作中では、インドのとあるカフェを舞台とし、イラン人の聖職者や中国人、黒人等、様々な立場の人物がそれぞれの宗教観を述べる。これが物語の中核となるが、翻案では大幅に追加されている。特に神秘主義系の教団や、イランで異端となったパーブ教についての著述があることは注目すべきである。また、とあるイラン人が様々な宗教を学んだ結果、無神論者に至ったことや、亡命を余儀なくされた身の上について考察すると、訳者の思想と重なる部分が多いと言える。訳者は宗教的家庭に生まれながら、パーブ教アザル派に改宗し、無神論を仄めかす著述もしているほか、亡命もしている。これらから、翻案から宗教的に不寛容な地域・時代への嘆きを読み取れ、訳者の思想が表れているものと考えられる。

3. 『エスファハーンのハージーパーバーの冒険』のペルシア語版における詩

本作品はこれまでも扱ってきたが、ペルシア語版の中におよそ 200 句の詩が挿入されているため、この翻案手法について特に着目した。作品中における詩の特徴として、以下の点が挙げられる。

当時の文学の「復帰運動」を踏まえた様式的傾向、新しい要素と伝統的手法の融合、戦の場面での英雄抒情詩の挿入、恋愛の場面での抒情詩の挿入、風刺詩が多用され、特に訳者による挿入詩が多いこと、教訓詩や諺の使用、イランの職業文化の反映、大衆に好まれる簡易な言葉を用いていること等が指摘できる。およそ 200 句のうち、約 70 句が他の詩人の作品から引用していることが明らかになった。

4. 総括

イラン文学は 10～14 世紀頃に最盛期を迎えたが、16 世紀から衰退期を迎え、難解な作品が多く誕生した。19 世紀に、黄金期の簡潔な詩に戻ろうという「復帰運動」が行われた。また、散文と韻文の双方を駆使する手法は中東地域において伝統的な手法である。それぞれの作品の訳者は、これらの復帰運動の影響を受けているとともに、西欧の新しい要素を携えた作品を、伝統的手法により訳したといえるであろう。また、作品から見える批判精神については、聖職者等の権力者に向けられていることが明らかになった。同時に、小説からはイランの宗教的不寛容な風土や、宗派間対立が表れていることに対する嘆きを読み取れた。こうした内容を「翻案」することというのは、検閲が厳しい風土において、知識人らが自らの思想を表明し、体制や権力を批判するための唯一の手段であったであろうと考えられる。